

栗坪良樹著『現代文学と魔法の絨毯』

—文学史の中の〈天皇〉—

鈴木貞美

小学館版『昭和文学全集』別巻の「昭和文学史」分担執筆をきっかけにして、著者が、文学史は、そして昭和文学史は、どうあるべきか、と問い、それに対する考えを展開し、また、その具体的実践としての三島由紀夫論をまとめたもので、「Ⅰ昭和文学史への構想」「Ⅱ昭和文芸への批評意識」「Ⅲ△昭和△の△パラドックス△—三島由紀夫を中心に」の三部と△付論△からなる。

「Ⅰ」は、「現代文学史は可能か—文学史の可能性をめぐる私見」「昭和文学史構想に関する私見」「△昭和文学とは何か△についての私見」という三つの学会報告を論稿化したものである。私なりにまとめてみる。

文学史とは、作家や作品の△変化△を読みとる記述者の「思想のドラマ」であり、△物語△である。△日本歴史△のモデル形式から帰納させる、△歴史△の一部をなす△文化史△としてのそれや、△近代文学△派の人々のように「文学体験を基に文学状況を整理」するものであるべきではなく、文学作品をあくまで△歴史的所産△としてとらえ、そこに「結果として描出されている」△歴史△を読みとることを根本課題として、△感受性や感性△に立脚しつつ、△演繹的に読み続け△ることによって成立する、と

する。

△昭和△という時代は、東洋と西洋の両側に足をかけながら△実体△に至りつかない日本近代文化の「巨大なパラドックス」が最も激しく現象した時代で、また、第二次大戦の戦前と戦後の「分裂」を内に抱え込んだ時代であり、一代で二世を生きた△天皇△に象徴される。以上を、平野謙、中村光夫、本多秋五、猪野謙二らの文学史の仕事や、三島由紀夫や井伏鱒二や川端康成らの作品、また研究者の文学史についての見解などを論じながら展開する文学史論、昭和文学史論である。

「Ⅱ」は、「戦後文芸批評に関する私見」と「昭和文学史の△二重構造△」の二稿からなる。三浦雅士による戦後批評家のイデオロギー性の断罪は、「時代思潮の空白の場所」からの自己正当化以外の何物でもないとし、平野謙、本多秋五、江藤淳に言及して戦後批評に対する検討の枠組みを、「思想的信奉と離脱」に置き、磯田光一の批評から「戦中と戦後の△二重構造△（ねじれ）」を摘出する。

「Ⅲ」の「散文表現の根拠」は、△戦後文学△が、その「△二重構造△（ねじれ）」を抱え込んでいたところから、「△マス・コミ△という神」に支配される今日へと変化してきたことを述べる。「三島由紀夫と△昭和△」は、△昭和△の「巨大なパラドックス」を象徴する△天皇△と最もよく対峙した作家という観点から、三島由紀夫の諸作をたどるもの。

△付論△「二十一世紀へ向かう小説」は、「△戦中・戦後△の時代的転換とそこから派生した△振れ△」を主題化した△戦後文学△の後継者として、中上健次、宮本輝、立松和平らを見る観点

を提示する。

全体としては、△歴史の所産▽としての文学作品の内に、作家の歴史の意識を読み取るという立場が明らかにされ、第二次大戦後の日本の小説の流れを、「△戦中・戦後▽の時代的転換とそこから派生した△振れ▽」を主題として読み取る方法を提示するもので、その象徴としての昭和天皇を△物語の祖▽とした三島由紀夫が検討される。それゆえ「文学史の中の△天皇▽」と副題されている。

ここには、文学史とは何か、を問う姿勢があり、文学作品を歴史の産物として読む姿勢が明確であり、いわゆる戦後批評の限界を越えようとする思想的な営みがあり、また、歴史還元主義や疑似科学的な方法や、今日の批評の状況を批判的に眺める態度がある。その点、尊重すべきものだと思う。昭和天皇の問題を、文芸の立場から問おうとする姿勢も、私の共有するところである。

だからこそ、問いたい。これは文学史論になっているか。昭和文学史論になっているか。

まず第一に、文学作品もまた歴史的産物であるのはよいとしても、それはどのような意味においてなのか。文学作品は、社会の歴史の産物でもあり、同時に社会の歴史から相対的に自立した文学の歴史の産物なのだ。その点が曖昧にされている。

第二に、社会の歴史の産物の意味が、作家の時代意識に限定されている。たしかに作家は、時代と向き合うがゆえにその意識が作品のうちには投影され、したがって、どんな作品のうちにも、作家の時代意識を読み取ることが出来る。作家の時代意識の表出として作品を読むのは、読解のひとつの方法ではある。

だが、文芸作品は、作者の時代意識に還元されるものではない。そんなことくらい著者も承知しているよう。だから、これは作品読解の方法として、作家の時代意識還元主義を表明したエッセイにほかならない。

第三に、筆者の歴史意識は、△昭和▽に「巨大なパラドックス」を見るもので、それと作家の時代意識の読解の接点に、昭和文学史像を形成しようとするものにほかならないのだが、これは戦後批評のイデオロギー性を乗り越えようとして、それを、時代状況に対する個の意識の分析においてなそうとした猪野謙二の方法と、さらに歴史観自体においてなそうとした磯田光一の方法を折衷したようなものらしい。

しかし、日本人の歴史意識の変化を研究したいのなら、文芸作品を対象とする必要はない。裏返せば、なぜ、文学なのか、文芸を対象とするのか、が根本的に考えられていない。

「人は何故、人を圧迫したり、差別したり、除け者にしたたりするのか、これを人間の真理の問題として考えてゆく場合に、私たちは人間描写に優れ、人間の内面描写に優れる文学作品を手掛かりにしなくてはならない」と著者は言う。しかし、そういう「人間の真理」を考えたいなら、ことさら文学にかかずらわる必要はない。その点に文学の特権はない。

戦後批評の主流派には、いかにそれがイデオロギーであろうと、西欧近代的なりアリズムという批評軸があったし、磯田光一の批評には、相対主義の思想と近代対反近代というロマンチックな図式が根底にあった。猪野謙二には、著者が指摘するように、自己の歴史的相対化という思想があった。

本書の著者は、文芸作品の底をなすものとして、作家の歴史意識を読みとるという方法を言うが、そこで摘出されるのは、結局のところ歴史の「パラドックス」を生きたという意識以外ではない。なぜ文学なのか、という問いが問われなかったのと同様、ここにおいて、なぜ、「昭和」なのか、という問いも問われていない。

「昭和」をアプリアリなものとするのは、永井荷風を模して、「われは昭和の児ならずや」と書いた磯田光一を継承しようとする態度の産物かもしれないが、大きな制度の転換後には、いつでも、どこでも、前代と当代のパラドックスを抱えるもので、一代で二世を生きた人びとは、世界の歴史の内に無数に存在する。一八四八年革命のあとにも、フランス革命の後にも、ロシア革命のあとにも、また徳川政権樹立のあとにも、明治維新のあとにも、「巨大なパラドックス」はあった。「巨大なパラドックス」は、日本の特産でも「昭和」の特質でもない。

いや、問題にしているのは、昭和天皇が一代で二世を生きたということで、そのことで、昭和天皇が一代で二世を生きた人びとの象徴になってしまふことなのだ、と著者はいうかもしれない。たしかに昭和天皇は、立憲君主としては、奇妙な運命をたどるようになったし、著者のいうように、日本人の天皇に対する感情がパラドシカルになったことは事実だ。が、それは第二次大戦後を見据えたアメリカ合衆国の世界戦略が決定したこと、で、「パラドックス」というのなら、アメリカに対するそれも、アジアに対するそれも読み取れるはずである。昭和天皇に一国の国民感情を象徴させてしまう論議は、象徴天皇制を歴史的に対象化しえていな

いからだ。

三島由紀夫が昭和天皇を「物語の祖」にまつりあげてしまったという著者の指摘は正しいが、それは彼が近代天皇制も象徴天皇制も歴史的に対象化しえていなかったからのことで、その点では著者も、三島由紀夫や一国主義の物語を書いた戦後批評家たちと同じ水準にある。猪野謙二の仕事に自己の歴史的相対化の思想を見てとった人の言説とは思えない。

どんな歴史も物語だというのは、あくまで、筋立てをもつ記述されたもの、という意味のこと。その筋立てに客観的妥当性を求めるところに、社会や文化や思想や文学の、それぞれの歴史に関する学問は成立する。そもそもある客観的妥当性のないところには、物語すら生じないのである。もちろん、その客観的妥当性も、それを支える立場や方法によって相対化されざるをえないが、それを「恣意」と言つては、物語も学問も成立しない。

学問の場合、己れの立場と選択する対象と採用する方法の限界を自覚し、運用の手続きから「恣意」を排することによってこそ、客観的妥当性が保証される。

著者は、結局、文学作品を歴史意識を探る好都合な道具にしてしまい、しかも、その歴史意識の内実には、前代と当代の「パラドックス」ということに尽きていた。これは「文学以前」であり、「歴史以前」である。

どうやら「昭和文学史」という課題は、著者の内なる「文学以前」と「歴史以前」に無理な結婚を強いたようだ。これもまた「歴史の産物」にはちがいがなく、妥当性の吟味をよそに、立場や方法を相対主義的に扱うから、すべてが「恣意」であるかのよう

(一九九三・一 有精堂 B6判 二四二頁 三千三百円)

にされ、その結果「恣意」がまかりとおり、「文学以前」と「歴史以前」がいたるところで結婚し、手厚い看護が必要な未熟児があふれかえっているのが、文芸批評の今日である。未成年同士の恋愛はほほえましいが、結婚して子供をつくるのには周囲とよく相談してからにすべきだろう。そうでないと子供がかわいそうだ。翻って鑑みるに、こんな憎まれ口をたたいたところで誰が役立てようわけもなく、かえって知らぬうちに我が身に災いを招くだけ、それを十分承知の上で、なお行わずにはいられない未熟さに、我ながらほとほと呆れはてる。

新刊紹介

中村明・森岡健二・徳川宗賢・川端善明・
星野晃一編

『集英社国語輪典』集英社

本辞典は携帯版でありながら項目数が約九万二千と広辞苑規模の中型辞典に迫っている。また、縦・横両様の組を用意し、それぞれに携帯版・机上版があり、使用者の必要に応じてその四種類から選択できる配慮がなされている。収録語も古代から現代まで幅広く、百科語も豊富である。そして表現関係の項目・解説が従来の国語辞典に比して充実している点が特徴である。例え

ば、連語の積極的な項目化、〈文章／口頭／俗〉等の位相表示、格用法・活用・修飾等を視野に入れた名詞・形容動詞・副詞の文法的性質(〈ナ／ノ〉〈ニ／ト〉等)の表示などは表現者に有効な情報を提供するものである。巻末、語彙の体系と歴史(森岡)・品詞(川端)・表現(中村)・方言(徳川)の概説もコンパクトで行き届いている。書架に加えられることをお勧めする。(平成五年二月 A5変型判 二千八百五十頁 三千二百円、机上版 四千三百円〈縦組み・横組み共〉)

〔木村義之〕